

游美

- 1 木村 利きむら りさんの作品と
作品についての言葉
- 2 作家探訪 迫 二郎先生
- 3 美に遊ぶ
- 4 美術鑑賞旅行
- 5 どっちがどっち？
いわいとしお×岩井俊雄
絵画教室
- 6 心に残る私の一点
あとがき



木村 利きむら り「活力あるサンマルコ広場」

2007年／淡彩画・スケッチ／F6号

旅は建築士を育てると信じ、新婚旅行を皮切りに世界各地を歩いてきた。

この作品も2007年10月に「カプリ島とナポリ、ポンペイ遺跡を巡るイタリアの魅力のすべて九日間」のツアーに妻と参加した時サンマルコ広場での作である。私は三度目のベネチアでサンマルコ寺院もベネチアングラス工房も既に二度見学している。そこで添乗員にお願いしてその時間をフリータイムにして頂いた。絵を描くこの一時間が勝負。広場は人、人で混み合っていた。中央より少し横に場所を

確保し、段ボールの箱を組立て据付ける。これが私のイーゼル。人混みの人達は何が始まるのかとガヤガヤし出す。私が絵を描くのだと分かると彼らは親切に前方を開けてくれた。みっともない絵は描けないな、と心の中で呟く。周りの話し声が気にならなくなって三十分。完成する。勿論淡彩画で色も付けたである。ずっと見ていた一人が微笑みかける。私も緊張から解きほぐされて微笑み返す。言葉が通じないのが残念。しかしこの情景がいつまでも印象強く残っている。
(水戸市在住)



ガラス工芸作家
迫 二郎 先生を訪ねて

煌めくガラスを愛して

ガラス作家迫二郎先生に取材をお願いしたところ、折よく水戸で個展を開催されており、早速作品を拝見することが出来た。大きなオブジェから掌に包み込みたくな



ゴブレット

る酒盃まで、ギャラリーの空間に光と色があふれていた。窓辺に展示されたガラスや香水瓶は傾きかけた夕陽をうけ輝き、その影の魅惑的な色彩にも心奪われる。

後日改めて笠間に迫先生を訪ねた。陶芸工房が点在する小高い丘に先生のガラス工房がある。木々と蝉時雨に包まれ避暑地のように。心地よい風が吹いている。しかし、工房の中ではガラスを溶かす窯が常時火口のように赤く燃えている。

お話を伺った別棟には次の作品展のための荷物が山積みされていた。全国からのオファーは途切れることがない。現代のガラス工芸界をリードする迫先生は、アロハシャツにファンキーな眼鏡。カッコイイオープンマインドな先生のお話は多岐にわたる。おっと油断していると取材する立場をすっかり忘れてしまいそうになる。我々のつまらぬ質問より、先生の静かな語り口の熱く濃いお話を聞きたい。

お生まれは熊本の菊池市。「小学生の頃から将来は何かを作っているのだろうと考えていた。幼い頃から世の中に対して「楽しい方向」を見つけてるのが上手で、それを探し変化を体感することがうれしかった。するといやなことがひとつも入ってこない」。天性の幸せハ



ショットグラス

ンター能力を授かった少年で、きっと周りの人たちに元気を振る舞っていたに違いない。その少年は長じて「多摩美大でガラスに出会いストーンとはまった。ガラスという神聖で神々しい素材を愛してしまっただからこそ好きでいたしと努力する。常に進化し変化し面白いと思う気持ちを持ち続けていたい。出逢いは偶然でもそれを必然にするのは自分」。きっと、ガラスも先生を「愛して」いる。身を溶かすほどに。相思相愛。だからこそ、ガラスという無機質な素材が迫先生の手にかかると、シャープなフォルムなのに有機的なあるいは官能的とすら思える造形物に創りあげられるのだらう。ガラス工芸は困難な技法を駆使する。「テクニク イズ チーズ 技に溺れるな。という言葉がある。若い時にどれだけ意味のない大きなものに創りあげられるのだから。その経験が創作活動には大事になる」。

作品のガラスを透してその向こう側に先生の存在を感じる。異分野で成功した人であれ無名の若者であれ、先生の少年の頃から変わらぬ煌めく魂に魅かれてしまう人たちがいる。その出会いが互いの人生に新しい変化をもたらす。それがまたたまらなく楽しいらしい。



石の形のコンポジション

迫 二郎(はざま じろう)

1966 熊本生まれ
1979 多摩美術大学ガラスコース卒業
1985 茨城県笠間市にガラス工房開設
1986 渋谷西武、松屋銀座にて個展
以降、松屋銀座個展〜2011(26回)
1987 日本のガラス展
1992 日本美術家連盟にて個展
2002 大阪大丸にて個展
2004 ホテルオークラにて個展
2006 熊竹堂瀬田記念館にて個展

2010-2011 京都大丸展
2013-2014-2015 銀座三越にて個展
2014 阪急うめだ本店にてガラス展
2014 鹿島神社式年大祭・御船祭に際し、
道具「種子親子」制作・奉納
2018-2020 松屋銀座にて個展
2019〜2021 公益社団法人 日本陶家協会・
トロッター制作
2021 豊盛画廊(山形)、ギャラリー盛城(福島)
にて個展
住所 笠間市

迫
二郎



内藤 学

今年7月の初旬、私は東京で見損ねた『鏡木清方展』を追いかけて京都国立近代美術館まで足を運んだ。猛暑の到来を予感させるねっとりとした蒸し暑い一日だった。目的は清方の代表作『築地明石町』。浅黄色の小紋の着物に黒羽織り。ちよいと振り向く女性の姿が粋である。もう一枚見たかったのが『三遊亭円朝像』。落語好きにはあまりにも有名な落語の神様。幕末明治に活躍した噺家で、人情話の『芝浜』、怪談『牡丹燈籠』、海外文学の翻案『死神』等傑作揃い。今でも数多の噺家が挑戦する。清方の父親と円朝の交流が深く、清方は思い出の中の円朝を描いている。高座に上がり正面を見つめ茶をすすする姿は、これから始まる一席を固唾をのんで見守る観客の緊張感も伝わってくる。



鏡木清方『三遊亭円朝像』
1930年 絹本彩色・軸 138.5×76.0cm
東京国立近代美術館蔵 重要文化財
©Akio Nemoto

落語好きが嵩じて、私自身も社会人噺家として高座に上がっていた。正確にはコロナ前までは。芸名を好文亭文文(こうぶんていぶんぶん)という。主に常陽芸文ホールで仲間と年3~4回定期公演を6年間続けた。300席のホールが空席以外は満席となった(ここ笑うところです)。ピーク時にはその空席も無くなった。入場料無料の力は強い。しかし武漢からの流行り病で公演は突然途切れる。その後やむなく中断。

そんな折、別の仲間から、「寄席」を作ろうという悪魔のささやきが。ふたつ返事で答えてしまったのが苦勞の始まり。それでも今年



鏡木清方『築地明石町』
1927年 絹本彩色・軸 173.5×74.0cm
東京国立近代美術館蔵
©Akio Nemoto

の9月10日、水戸東照宮下の宮下銀座で、その名も『水戸みやぎん寄席』が柿落としを迎える。週末だけではあるが常設の寄席小屋である。東京からプロの噺家を毎週呼ぶ。寄席小屋は東京大阪が中心で、地方都市にはまず、ない。客席は50も満たない。ギャラも安く、ブラウン管(古い)に出てくる人気噺家は到底呼べない。二つ目、真打ちになったばかりの若手噺家を育てる。心意気だけは立派だがその実は火の車である。これをお読みの皆さん、誌面にあるQRコードから入るか、『水戸みやぎん寄席』とネット検索してください。そしてチケットを購入いただき、無名の若手を応援してください。年会費12,000円のサポーターも募集中です。伏してお願ひ申し上げます。

清方の『築地明石町』も『三遊亭円朝像』も、涼しげなその瞳は何を見ていたのか。今の私は、柿落しに向け次々に現れる課題雑題をやっつけるのに精一杯。とても涼しくはない。寄席だけに、落ちつかないといけません。失礼しました。(水戸市在住)



2022年6月10日、コロナ禍のため参加人数を制限し、会員19名がいわき市立美術館及び天心記念五浦美術館を訪れ、3年ぶりの美術鑑賞旅行を堪能しました。

3年振りの美術鑑賞旅行

高崎 せつ子



例年よりずっと早く梅雨入りしたばかりの6月10日。コロナの影響でしばらく中止になっていた美術鑑賞旅行が、感染予防対策に万全を期して再開されました。

まず最初はいわき市立美術館で、いわき駅の近くにあり「松本竣介“街”と昭和モダン」が開催中で、藤島武二・梅原龍三郎・東郷青児等の懐かしい方々の作品が展示されていました。松本竣介の作品の中では、淡いブルーの“青の風景”が印象に残りました。

次は、楽しみのひとつだった五浦観光ホテルでの昼食です。雨が降り出した中、太平洋を一望できる部屋で、海の幸いっぱい美味しい会席膳を頂きました。食事が終わるころ、思いがけず女将が「近代美術館友の会の皆様では……」と、大観の別荘であった特別室に案内して下さいました。窓のすぐ下は、断崖絶壁で荒々しい波が踊る絶景が広がっていました。日本近代美術の基礎を築いた大観が生活していた“離れ”を、目の当りにして、その時代にタイム

スリップした様な気持ちに浸りました。

その思いを胸に秘めて、いよいよ天心記念五浦美術館に向かいました。義父が日本画家だった事もあり、この美術館には深い思い入れがあります。今年は開館25周年で、年間を通して展覧会を企画しているそうなので、これも楽しみです。今は成川美術館蔵の日本画で「花愛でるところ、恋の詩とともに」で、華麗な花々の姿を表現した素晴らしい作品ばかりでした。その中でも私は、牧進の屏風「再喜樹宴」に心を引かれました。一本の椿の大木の中に、左隻には満開に咲き誇る真紅の花たち、右隻には太い幹と覆い尽くすほどの落ちた椿の花。実際には有り得ない構図なのに、まったく違和感なく、椿の一年、人間の一生、永遠に続く生命力が感じられました。今ここに、こうしている私も、ずっと昔から引き継がれてきた命なのだ……と改めて感謝の思いが溢れてきました。

降っていた雨もいつの間にか上がり、私の手には、今日の思い出、メネの「水蓮の雨傘」が残りました。

(笠間市在住)



左隻
牧進「再喜樹宴」 1994年／紙本彩色・六曲一双屏風／215×600cm／成川美術館蔵



参加会員及び井野高席宇芸員(後列左から2人目)
天心記念五浦美術館



参加会員 いわき市立美術館



右隻
牧進「再喜樹宴」 1994年／紙本彩色・六曲一双屏風／215×600cm／成川美術館蔵

どっちがどっち?

いわいとしお×岩井俊雄

2022年7月2日～9月19日

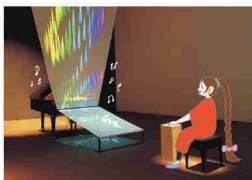
100 かいだてのいえとメディアアートの世界

久しぶりに、展示会場に大勢の子ども達の姿を見、元気な声を聞くことができた。夏休み中ということもあって親子連れが多い。小さな子どもたちは、お祭りの屋台でも渡り歩くかのように目を輝かせ、いろいろな展示物に触って動かし、楽しんでいた。期間中に開かれた4回の関連イベントは大人気で、すぐに申込が定員になったというが、実際に会場の様子をみて、なるほどと納得。展示は夢溢れる絵本を始めとして、手作り玩具、バラバラ絵本、映像装置としてのピアノ等々、子どもの好奇心を駆り立てる展示満載である。

「子ども時代の発明ノート」からは、絵本作家、

メディアアーティストとしての類まれな才能は子どもの頃から育まれてきたことが窺える。絵本「100 かいだてのいえ」のアイディアスケッチでは、よりよいものを追求し、納得いく形にしていく過程が見られて興味深かった。

いわい(岩井)氏の「自分のものづくりの根本には、常にそれを見せたい人、喜んでくれる相手があった」という言葉が印象深い。「誰も見たことがないものをつくろう」と、彼自身ワクワクしながら新たな創作を広げていくのであろうと思うと、今後どのような世界を見せてくれるのか楽しみである。



作品「映像装置としてのピアノ」



展示会場での子どもたち

絵画教室

「人物を描く」講座に参加して

2022年7月22日、26日、29日、8月2日

川津 しげ子

実物のモデルを描くこの講座には、友の会会員のほか、講師の清水優先生の教室の生徒さんも参加された。4日間のコースで画材は自由という。人物画が何年かぶりの私は、絵画の基本であるデッサン画を描くことにした。

人物画は、頭と体のバランスが難しい。鉛筆で頭の先から肩幅、腕の長さや足の位置など形をとっていく。細部にこだわり何度も描いたり消したりを繰り返していると、先生から「大きく捉えて全体を見るように」とアドバイスがあった。顔のパーツ、特に目の表情は重要なところで時間をかけ、衣類に濃淡の影を入れると、リアルな人物像が現れてきた。

最終日には絵の発表と先生の評があった。参加者の多くは、人物画を描き慣れているように見えた。油絵、水彩画、パステル画など色を塗る絵がほとんど。きれいな色使いで、モデルさんが生き生きと描

かれていて完成度の高い絵が多かった。私のデッサン画も、もう少し陰影にメリハリをつければよかったと思う。今後の課題である。

4日間という日程は、比較的自分の作品と向き合える時間があつたように思う。

充実できた講座だった。(ひたちなか市在住)



絵画講習会風景(2022年7月22日) 美術館講座室

心に残る私の一点

松本竣介「盛岡風景」

小原 えり子

3年前千葉県内から水戸に引っ越し、県立近代美術鑑賞友の会に入会しました。これからは好きなだけ美術館へ行くことが出来る。友の会の活動にも参加させて頂くことが出来ると思っていたのですが、コロナがなかなか収束しません。やっと参加出来た行事は今年6月10日の「春の美術鑑賞旅行」でした。行き先の一つはいわき市立美術館の「松本竣介〈街〉と昭和モダン」展。私の好きな松本竣介の絵画展が友の会旅行第1回目ということにご縁を感じました。

松本竣介には「街シリーズ」「画家の像」「立てる像」等ありますが、私にとっての一点は、私の故郷を描いた「盛岡風景」です。松本竣介が1929年に上京してから12年後、「ニコライ堂と聖橋」「画家の像」と同じ1941年に発表した作品です。画面の大半を占めるのは市営野球場、その向こうの小高い丘の上にあるのはランドマークと言える測候所（現気象台）です。

この絵はどこから描いたのだろう。部分を見ると測候所下に住んでいた私が実際に見た風景とは配置が違っているのです。松本竣介は手元に沢山のスケッチを置いて描いていたと言われているので、

上京して12年後の彼の想いにピッタリな、その時代の「盛岡風景」として描いたのだらうと思います。そう考えると正確な位置など気にならなくなり、松本竣介が描いた青と緑の世界の中に、草に覆われていた懐かしい風景が蘇ってきます。

岩手県立美術館2階の松本竣介の部屋正面にかかっているこの絵を見ると、新幹線が盛岡駅近くになると車窓から見えてくる岩手山と同じように、「お帰りと」言ってくれているように感じます。

(水戸市在住)



松本竣介「盛岡風景」1941年・油彩・カンヴァス/53.2×72.8cm
岩手県立美術館蔵

あとがき

- 厄介な感染症が現れてから断念していた友の会の美術鑑賞旅行。2019年11月の滋賀行きから実に2年半以上の中断を経て、いわき市立美術館、天心記念五浦美術館へ出掛けました。7月には絵画講座も開催されました。「遊美」の紙面も、友の会活動が中止になっている間減らしていたページ数を6ページに戻して、できるだけ多くの会員の方々の声を掲載させていただきます。
- 鎮木清方「三遊亭月朝像」「築地明石町」の著作権使用許諾を、根本章雄様からいただきました。厚くお礼申し上げます。
- 鎮木清方記念美術館の小林美香様にもお礼申

- 上げます。また、作品アータをDNPアートコミュニケーションズ松橋栄美様からご提供いただきました。厚くお礼申し上げます。
- 成川美術館蔵、牧進「再喜樹宴」掲載に関し、手続きについてご教示及び画像提供いただきました次城県天心記念五浦美術館井野功一首席学芸員、著作権使用許諾をいただきました株式会社 東京美術倶楽部著作権管理委員会 北條朋子様並びに作品画像の扱いについてご教示いただきました成川美術館東京事務所 鹿子木明子様に厚くお礼申し上げます。
- 岩手県立美術館、松本竣介「盛岡風景」の画像提供及び掲載の許可を画像管理担当の下岡史奈様に取得して頂きました。感謝申し上げます。

ます。

- 「どっちがどっち？いわいとしお×岩井俊雄 100かいたのいわいとメディアアートの世界」展示関係の写真を、吉田衣里首席学芸員にご提供頂きました。感謝申し上げます。

茨城県近代美術鑑賞友の会会報

遊美 No.101

発行 2022(令和4)年11月
編集・発行 茨城県近代美術鑑賞友の会
〒310-0851
水戸市千波町東久保 666-1
TEL.029-243-5111
E-mail : fmonaibk@gmail.com
HP : <https://www.fmoma.com/>

印刷 株式会社 光和印刷